

探検家アドルフ・ノルデンショルドが  
スウェーデンに日本関係書物  
コレクションをつくった話

奥 正敬

時代が明治に入り既に10年を経ている頃、スウェーデンを出港して北極海に入り、ベーリング海から太平洋へ抜けて横浜へ入港した船がありました。この船の名をヴェガ号と言い、流氷が漂う厳寒の海に閉じ込められながらも伝説の「北東航路」を見事に発見したのでした。指揮をする人物はノルデンショルドという探検家で、日本滞在中に多彩な分野の書物を買集め、ストックホルムに持ち帰って日本関係の一大コレクションを作ることになります。

■フィンランドを離れて祖先の地スウェーデンへ

アドルフ・エリック・ノルデンショルド (Adolf Erik Nordenskiöld, 1832-1901) は、19世紀初頭から帝政ロシアの属領となっていたフィンランドで、スウェーデン系移住者の子として生まれました。彼はヘルシンキ大学で鉱物学を専攻して鉱山省に就職しましたが、ロシアの統治政策を非難したことから職を追われました。このため、1858年に先祖が眠るスウェーデンに移り、ストックホルムの国立博物館で地質学の研究に携わります。ただし、彼の姓は父祖がフィンランドでの軍功によって貴族に列せられた時に、ノルドベルイという名から改めたもので、スウェーデンで生活を始めても「北の盾」を意味するノルデンショルドを名乗りました。

この年、彼はスウェーデンの北極遠征隊に参加して、北緯75度を越えた極地であるスピッツベルゲン島へ赴きました。その後、数回にわたってこの島を訪れ、またグリーンランドでは自ら組織した探検隊を率いて指導者としての自信を深めていきます。<sup>(1)</sup>

■伝説を信じ、北東の海をめざす

やがて、彼は北東航路の開発計画に着手し、1877年に探検計画書を国王オスカル二世に宛てて提出します。この計画は北極海を望むユーラシア大陸沿岸において、古くよりスカンジナビ



Adolf Erik Nordenskiöld

“Vegas fard kring Asien och Europa” (1880年) より

ア半島からベーリング海へ出られることが信じられていたため、これを実証する中で自然科学上の新発見を目指したものでした。

これより先の1869年にはスエズ運河が開通しており、ヨーロッパからアジアへ入る最短の航路が作られていました。しかし、北欧の人々にとっては運河へ至る距離的な問題もさることながら、エジプトやフランス、イギリスなどの利権が絡んだ運河の利用には抵抗があったようです。このように、スエズ運河の開通そのものが、新航路を求める追い風になっていたと考えられます。

また、この計画書にノルデンショルドは「ベーリング海峡のむこうでは、探検隊はいつそう豊かで多様な自然を持った諸地域と出会い、(中略)見る者を惹き付けるでしょうし、その苦勞に報いるに足りる豊かな実りを与えてくれるであります。」<sup>(2)</sup>と述べ、計画を記述した科学的な文章の中で、指導者として情緒面から隊員の気持ちを鼓舞することも忘れていません。

■ベーリング海峡から太平洋へ、そして日本では

計画が整うとノルデンショルドは資金調達を進めますが、国王オスカル二世からの寄付やスウェーデン政府をはじめ、ロシア商人などからも出資があり、同国はもとより国境を越えてこの航海にかけていた期待の大きさが窺われます。

集めた資金で購入したドイツ製の機帆型捕鯨船ヴェガ号は、総噸数357噸の文字通り機関と帆を備えた当時としては新鋭の大型船でした。この船に隊長ノルデンショルド以下、研究員や乗組員など30名が乗船して、1878年6月2日にスウェーデンのイヨテボリを出港。その後、ノルウェー海からバレンツ海へ入り、三隻の随行船とも別れを告げて予定通りの航海を続けました。しかし、9月に入ると季節外れの流氷に阻まれ、ベーリング海峡まであと数日の海域で越冬する